

執筆者紹介

(50音順／*は編者)

いしだ ともふ
石田 倫識 愛知学院大学教授

〔主著〕「被疑者の黙秘権に関する一考察——イギリス黙秘権制限立法を手がかりに」九大法学86号（2003年）
「黙秘権保障と刑事手続の構造」刑法雑誌53巻2号（2014年）

いとう むつみ
伊藤 睦 京都女子大学教授

〔主著〕「検面調書の証拠能力——アメリカにおける証人による公判外供述に関する議論を手がかりとして」法学64巻2号（2000年）
「対質権と強制手続請求権を貫く基本理念」法学69巻5号（2006年）

くずの ひろゆき
***葛野 尋之** 一橋大学教授

〔主著〕『未決拘禁法と人権』（現代人文社、2012年）
『刑事司法改革と刑事弁護』（現代人文社、2016年）

くろかわ きょうこ
黒川 亨子 宇都宮大学准教授

〔主著〕「差別的起訴について」刑法雑誌58巻2号（2019年）
「少年事件が捜査遅延によって成人後訴追された場合の救済方法の検討——捜査の違法を量刑事情として考慮することの可否」石田倫識・伊藤睦・斎藤司・関口和徳・瀧野貴生編『刑事法学と刑事弁護の協働と展望〔大出良知・高田昭正・川崎英明・白取祐司先生古稀祝賀論文集〕』（現代人文社、2020年）

さいとう つかさ
斎藤 司 龍谷大学教授

〔主著〕『公正な刑事手続と証拠開示請求権』（法律文化社、2015年）
『刑事訴訟法の思考プロセス』（日本評論社、2019年）

ささくら かな
笹倉 香奈 甲南大学教授

〔主著〕「死刑事件と適正手続——アメリカにおける議論の現状」法律時報91巻5号（2019年）
「乳幼児揺さぶられ症候群（SBS）をめぐる議論の現在地」季刊刑事弁護103号（2020年）

せきぐち かずのり
関口 和徳 愛媛大学准教授

〔主著〕「再審における証拠の明白性の判断方法・再論——全面的再評価説にたつことの意義」石田倫識・伊藤睦・斎藤司・関口和徳・瀧野貴生編『刑事法学と刑事弁護の協働と展望〔大出良知・高田昭正・川崎英明・白取祐司先生古稀祝賀論文集〕』（現代人文社、2020年）
『自白排除法則の研究』（日本評論社、2021年）

たかひら きえ
高平 奇恵 東京経済大学准教授

〔主著〕「悪性格証拠の許容性の判断手順の在り方」現代法学36号（2019年）
「悪性格証拠の推認過程の明確化の必要性——イギリスの相互の許容性に関する議論を参考に」石田倫識・伊藤睦・斎藤司・関口和徳・瀧野貴生編『刑事法学と刑事弁護の協働と展望〔大出良知・高田昭正・川崎英明・白取祐司先生古稀祝賀論文集〕』（現代人文社、2020年）

なかがわ たかひろ
***中川 孝博** 國學院大學教授

〔主著〕『法学部は甦る！上——初年次教育の改革』（現代人文社、2014年）
『刑事訴訟法の基本』（法律文化社、2018年）

^{みちの たかお}
* 瀧野 貴生 立命館大学教授

〔主著〕『適正な刑事手続の保障とマスメディア』（現代人文社、2007年）
『2016年改正刑事訴訟法・通信傍受法 条文解析』（日本評論社、2017年／共編著）

^{まさき ゆうし}
正木 祐史 静岡大学教授

〔主著〕『ケースブック心理臨床の倫理と法』（知泉書館、2009年／共編著）
『司法と福祉の連携』の展開と課題』（現代人文社、2018年／共同責任編集）

^{まつくら はるよ}
松倉 治代 大阪市立大学准教授

〔主著〕「刑事手続における Nemo tenetur 原則——ドイツにおける展開を中心として（1）～（4・完）」立命館法学
335～338号（2011年）
「身分秘匿捜査と自己負罪からの自由——欧州人権裁判所アラン事件判決の意義」石田倫識・伊藤睦・斎藤司・
関口和徳・瀧野貴生編『刑事法学と刑事弁護の協働と展望〔大出良知・高田昭正・川崎英明・白取祐司先生古稀
祝賀論文集〕』（現代人文社、2020年）

^{みどり だいすけ}
緑 大輔 一橋大学教授

〔主著〕『刑事訴訟法入門〔第2版〕』（日本評論社、2017年）
『基本刑事訴訟法 I・手続理解編』（日本評論社、2020年／共著）